

---

# いつもあなたを見ている

プルート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつもあなたを見ている

### 【Nコード】

N1535C

### 【作者名】

ブルート

### 【あらすじ】

『忘れないで

私がいいつもあなたを見ている事を

』

「人は死んじゃったからお星さまになるんだよ。」  
え？

ベッドの上で私を膝の上に乗せているお母さんが、私の髪をブラシでとかしながら急にそう言ってきた。

「お星さまに　なるの？」

「そうよ、メグ。お星さまになってお上にいくの。」

「でも、死んじゃったなら天国に行くんじゃないの？みんなそう言ってるよ。」

幼い私のこんな純粹すぎる質問に、お母さんはにっこりと笑って答えた。

「うん、そうね。でもね、天国に行くにはお星さまにならなきゃいけないのよ。」

「ふーん。」

私は呼んでいた絵本をパタンと閉じて、お母さんの方へ振り返った。

「じゃあ　お母さんももうすぐお星さまになるの？」

私の母は太陽のようなひとだった。いつも笑っていて、誰にでも分け隔てなく優しくかった。私はそんな母が好きだった。特に、私を膝に乗せて耳元で綺麗な歌声を聴かせてくれる時間は、私にとってこの上ない楽しみだった。母はまさに健康そのものだったのである。

ところが、私が5才の時母は突然病に倒れた。最初はただの風邪だと思って心配しなかった。そんなある日、

「ゲホっ、ゲホっ、ゲホっ。」

母がいきなり目の前で血を吐き出してしまったのだ。大丈夫よ、



私を抱きしめてくれた。

「ごめんね、メグ。心配かけて。」

「ううん、私は大丈夫！お母さんは？」

「お母さんも、大丈夫！元気もりもり！」

でも、そんなお母さんの顔は元氣じゃなくって、無理して笑っていた。それは子供だった私にこそわかった事だと思う。しかし私はそれをあまり重く受け止めてなかった。

大丈夫と言っていたお母さんは、何日たっても家に戻ってこなかった。お父さんに聞いても、

「大丈夫、大丈夫。」

しか言わない。不思議に思った私は、お父さんにだまって幼稚園の帰りにこっそりお母さんの病院に行ってみた。お母さんの病室はなんとなく覚えていたので簡単に行く事ができた。

病室の前に来て、中をのぞくとビツクリするような怒鳴り声が聞こえた。

「どういうことだ！！！史子が　　史子の病気がもう治らないなんて！！！！！」

これって　　お父さんの声！？どうしてこんなに怒鳴ってるの？何があつたの？もつと知りたくてつま先立ちで中を見てみると、お父さんがお医者さんの衿元をつかんで怒鳴っていた。その後ろでお母さんが泣きそうな顔で静止させようとしていた。

「ですからね、ご主人。誠に残念ですが、奥様のご病気は現在の医療技術では完治する事はできません。それに、発見が

遅かったため余命は長くて3ヶ月　　」  
そこまで言いかけると、お父さんがそのお医者さんをぶん殴った。

「あなた！もうやめて　　」

お母さんの必死に止める声で、お父さんは動きを止めた。そして悔しそうに「チクシヨツ！」と言って涙を流して床に座り込んだ。

うそ

お母さん、もう長く生きられないの？もうすぐ死

んじゃうの？そんなの嫌だよ！

私は耐えきれなくなつてそこから逃げて行つた。

お母さんとの楽しかった日々が頭をよぎる。このお母さんとお別れなんて　　そんなの絶対にイヤだ！

その夜、私は誰にもその事を言えずベッドの中で一人で泣いていた。

「お母さんもうすぐお星さまになるの？」

普通ならこんな質問、大人なら怒るだろうがお母さんは顔色一つ変えずに

「お母さんも　　もうすぐお星さまになるのね。でもねお母さん、ちつとも寂しくないよ。だって、いつもお空の上からメグやお父さんの事が見えるから。」

「でも、お話はできないんだよね？」

「確かに、お話はできないわね。でも、メグが下から話しかけてくれば答える事はできなくても、ちゃんとお母さんわかるからー！。

「　　そう言つと、お母さんは一通の封筒を取り出して私に渡してくれた。」

「これは、何？」

「それは、手紙よ。でもすぐに開けないでね。20年後　　メグが大人になつたら開けてね。」

「どうして、今開けちゃいけないの？」

「それはね、これが20年後のメグへのお手紙だから。ね？」

お母さんにはっこり笑つて私を抱きしめた。

「メグ　　。お父さんの事頼むわね。寂しがりやなのよ、あの人。」

「　　そんな事言わないでお母さん　　。私の目からは大粒の涙がこぼれてた。」

「うん。わかった。この手紙も、20年後の私に渡すね。今までありがとうお母さん。」

次の日、お母さんはお星さまになった。お父さんは一日中お母さんにすがって泣いていた。だけど私は泣かなかった。夜になれば、お母さんがお星さまになって出てきてくれると思ったから。お葬式の時も色んな人から同情されたけど、私はお母さんがいなくなったなんて信じなかった。だって、お母さんはいつも上にいるもの。

しかし、私の心が大人になっていくにつれてそんな事信じられなくなっていた。友達が「天国なんて無い」とか「死んでも星にならない」と言っていたからかもしれない。だから私はもう夜になっても空を見なくなっていた。

「……………20年後。私は25才の大人になっていた。職業は医者。なぜなったかというと、もう私みたいな子を出したくなかったから。お母さんがいなくなってしまう悲しい子を。」

お母さんに”20年後に読んでほしい”と言われた手紙を、今私は開けようとしている。どんな事が書いてあるのだろう？期待いっぱいな気持ちで手紙を開けた。すると、なつかしいお母さんの達筆な字があった。読んでみると

「メグへ お元気ですか？お母さんは天国で元気に暮らしています。なんて言っても、もう大人になったあなたはこんな事信じてないかもしれないね。死んだ人がお星さまになるなんて。でもね、これだけは信じていてほしい。お母さんがいつもあなたを見ている事を。どんな時もあなたを見守っているよ。つらい時だって泣きたい時だって。あなたは独りじゃない。それだけを忘れないでね。もっと書きたい事はたくさんあるけど、全部書いたらキリがな

いからこれで終わりにします。いつまでも元気だね  
お母さんより』

手紙の最後に小さな染みがついていた。お母さん　泣きな  
がらこの手紙を書いたのかな　お母さん　。  
私はもう涙が止まらなかった。私、信じてるね。お母さんがいつ  
も私を見ていてくれるって。だから恥ずかしくないように生きて行  
くね　　またね、お母さん

メグ、いつもあなたを見ている

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1535c/>

---

いつもあなたを見ている

2010年10月8日15時31分発行